

当時、薩摩藩は第 28 代島津斉彬の治世であった。

彼は、幼少の頃、洋癖開明派で豪傑肌だった曾祖父重豪の薫陶を受けて育っている。

多分にその影響を受けた斉彬は、
藩内外に於いて英才の誉れが高く、
そのスケールはゆうに薩摩藩を超えていた。
越前藩主松平春嶽（慶永）が、
その著書「逸事史補」の中で斉彬のことを次のように評している。

**「斉彬公は、治世以来初めて見たる英主なり。
松平定信候は英明の人たりしと聞くも、
我れその人を見ず。
斉彬公を見て初めて英明の主とは
此の如き人を指すならんかと信じたり」**

当時、賢明で聞こえた

水戸斉昭、伊達宗城、山内容堂などの諸侯も
揃って斉彬には敬意を表していた。
幕府首脳も、彼の頭脳が欲しくて、
斉彬を薩摩藩主にするため密貿易をネタに
前藩主斉興を強引に隠居させようと図った程である。
藩内部では、昔、重豪の浪費で苦勞している
一部保守派重役たちから見れば、
重豪に似ている斉彬を危ぶむ声があるのだが、
将来を夢見る若い藩士達からの人気は、絶大なものがあつた。
勿論、西郷も例外ではない。

斉彬は、西郷から再三再四提出されていた
「農政に関する建白書」のことは知っていた。

達筆で、その内容はまだ浅くはあるが、
行間にある誠意熱情にはただならぬ素地が感じられた。
聞けば、とてつもない大男で、目がいいという。

「どんな男なのだろう・・・」

斉彬でなくても興味を持ったであろう。

彼はどこかで直接会う機会を、と思っている。